

第6回 万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けた ビジョン有識者ワーキンググループ 議事録（メモ）

- 日時 : 令和元年12月19日（木）13時30分～15時
- 場所 : 大阪府庁本館5階 議会会議室1
- 出席者 : * 敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

<委員>

- 石川 智久（株式会社日本総合研究所調査部 マクロ経済研究センター所長）
- 嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 教授）
- 川竹 絢子（WAKAZO 執行代表）
- 高橋 朋幸（株式会社三菱総合研究所 西日本営業本部長兼万博推進室長）
- 野村 将揮（Aillis Inc. 執行役員 Chief Creative Officer、
World Economic Forum（ダボス会議）Global Shaper）
- 本村 陽一（国立研究開発法人産業技術総合研究所 人工知能研究センター 首席研究員）
- 橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構 特別教授、
大阪府立大学 観光産業戦略研究所長）
- 薬王 俊成（WAKAZO 執行代表）

- ◆事務局から資料4の「大阪の将来像とそれを実現するための3つの柱について」部分を説明。

《意見交換（「大阪の将来像とそれを実現するための3つの柱について」部分）》

○橋爪委員（座長）

「将来像とそれを実現するための3つの柱について」の説明ありがとうございました。この部分に関しましては、初回より議論をいただいているところであり、先日、知事からの了解を得られたということですので、ワーキングとして、この部分は固めさせていたいただきたいと思っています。

もっとも Global Good Hub Osaka のところなど、他の候補を記載しているところもありますので、全般にご意見、及び修正等のご意見がありましたら、ご指摘いただければと思っております。

○本村委員

今回からまたということで、経緯を含めて確認ということもあるのですが、最近 AI が数年前のニュアンスから少しトーンが変わってきておりまして、例えばで言うと、今、丁度、ロボット博でやっていますけれども、人間と勝負する卓球なのですけれども、あれは実は人に合わせてレベルを変えて、人を楽しませるというのにシフトしている。そういう人に対して支援する、更に言うと人の能力を拡張するというような人に対する態

度の違いが大分 AI、IoT、Society5.0 の中にも出てくるだろうということで、このタイミングで先駆けると、人と協調、人間協調、人間拡張と言ったものをイメージ的に頭に付けてみるとですね、どちらかと言うと人と対峙する技術ではなくて、ここで扱うのは人と協調・拡張する AI に限定するぐらいでも、メリハリが出て良いのかなと思いました。

そうすると何か活用しながら AI も大事だけれどというエキスキューズみたいなところが、最初から人間支援型の AI、という方向性で整えられたらなと思いました。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。

AI でもドラえもん型みたいなことが議論されている。人に応じてサポートの仕方が違う。各人のことがビッグデータに入っていて、結果、この人のためになる支援に留めるという判断をする。おっしゃる通りのことだと思います。

○野村委員

大賛成です。Amusing Creations は僕が出した案なのですからけれども、プレゼン時に冒頭で挙げた例が Expand Humanity という、まさに人間性の拡張を打ち出したものでありました。本村先生のご意見もぜひ反映いただけるといいかなと思います。

個人的な好みで言うと、いま投影されている Osaka Amusing Creations のスライドは、ビジュアルとしてカッコいいものが欲しいですね。僕も素人ですが、必要があれば友人らに知見を借りることもできるかと思います。

他の方も感じていらっしゃるかもしれませんが、Global Good Hub Osaka は、ちょっと語感が悪いので、概念的にはアリなのですからけれども、何か別のものがあるといいなと。

○橋爪委員（座長）

右に二つ案がありますが、その他の英語では。

○野村委員

Origin of Paradigm と Birth Place of Paradigm ですよね。

どっちも、僕が出したのですけれど、多くの人にとってはちょっと難しいかなと思っています。

○橋爪委員（座長）

Paradigm が付くと、上位概念になる。

○野村委員

そうなのです。

○橋爪委員（座長）

時代を変える気運でいかないといけない。

○野村委員

そういう都市をめざしたいということだと思っておりますので。

○橋爪委員（座長）

他、いかがでしょうか。

○嘉名委員

前回からの議論をまとめていただいたという印象ですね。

一個、立て付けで気になったのは、世界、登場人物を見ていくと、まず世界というのがあって、人というのがあって、「①多様なチャレンジによる成長」というので、都市というキーワードが出てくるのですけれど、何か地域とか社会とかそういうコミュニティみたいなものが要らないのかなと、ちょっと思ったのです。人の次が大阪みたいな感じになっていて、その次が世界。その間にもう少しコミュニティ、或いはコミュニティの概念が実は恐らくもう変わっていて、世界の人とも繋がっていて、それが正にバーチャルなというか。何か大きなタイトルは変わらないのでしょうか、例えば「②いのち輝く幸せな暮らし」というところで、すべて人とか書いていますけれども、例えばこれに社会という言葉が出てきますね。コミュニティとか。ちょっとそういうのが入ってくると、少し地域の人達にとっては受け入れやすくなるかもしれないなと思いました。

それから、より分かりやすくみたいな話も野村さんもおっしゃっていたのだけれども、子ども達にどう届けるかと言うと、また別の宿題があるなと思っていて、これをどう子ども達に届けるのということですね。それもちょっと少し考えていくということも必要があるのかなということですね。子ども達に分からないことではいけないなというこだわりがある。

それから Global Good Hub は、良い答えがないかもしれませんが、ちょっと迷ったとしたら、例えば「ともにつくる」というのは正に Co-Creation ですね。だから Global Co-Creation Hub とか。あまり新しい言葉を作るよりは、今入っている言葉でいった方が迷わないのかなとは思いました。

○川竹委員

Global Good Hub Osaka を最初に提案させていただいたのですけれども、意図としては若い人や子どもがワクワクするということと、次の世代を担う人が世界・未来を創るという時に、今若い人というのは Social Good という言葉にとっても共感していて、自

分達の取り組みはあくまで自分達がいるコミュニティの中だけに浸透していくという意識で活動している人が多い時に、コミュニティから自分達の活動を世界に広げていくという Social Good の Social を Global に変えると、自分たちのソーシャルなコミュニティの中の活動が世界に広がる可能性があるのだというところで、共感しやすいかなど。Social Good の Social を Global に変えて Global Good Hub というのを表に出させていたいただいたというのは、この言葉に込められた意図になっています。

Global Good も Social Good も割と発展があるという形で、私の中ではセットとして提案させていただいております。

○本村委員

今の話で、なるほどと思ったのはオープンにするとか、ペイフォワード的な意味なのですかね。グローバルで言おうとしていたのは。

○川竹委員

はい、そうですね。

○本村委員

よりオープンにするという方向感になってくるので、ローカルコミュニティからもうちょっと広いところ、更にもっと広くというように連続的に開かれた感で、最後はグローバルまでいくという。

○川竹委員

そういうイメージ。

○本村委員

そうだと、何となく純粹にしたらオープンとか、フォワードという方向感がグローバル方向という意味だと腑に落ちました。

○川竹委員

ありがとうございます。

○本村委員

それもコミュニティとしての場という意味を持たせる方向で、場が広がるような。

○川竹委員

そういうイメージが強いです。

○本村委員

コミュニティがオープンというのには何かあるのですか。理屈的にはしっくりしました。子どもにとってコミュニティが一番として、どんなふうなスタイルを提案するのかという宿題もあると。

○橋爪委員（座長）

将来像と柱を示す必要がある。政策立案の上位概念では、方向性を示す概念が必要になる。他、ございますでしょうか。

○薬王委員

さっきの話で「ともにつくる」のところで Co-Creation とかの話があったらいいのではないかと嘉名先生からありましたが、僕も全くそう思っていて、川竹の話も含めると、コンセプトとしては広がって行って、みんなと一緒にやろうといったことが重要だと思っています。そのためキーになるべき単語は”Co-“だろうと思うので、単純に Co Good Hub Osaka とかでいいのではないかと思います。

○野村委員

恐らく概念的な話は、みなさん多少のすれ違いがあっても概ね了解ができるのかと思います。あくまで語感の話として、Global Good Hub は、僕も反対で、Co-Good Hub も反対で、Global Co-Creation Hub はギリギリありだと思っています。語感の話をするのであれば、最後はメールで委員間を出しあって投票するとか、座長預かり・事務局預かりとかにすればいいのではないかなと思っています。

○橋爪委員（座長）

三本柱があって、ここだけ大阪が入っているのもどうか。これを外してもいいと思ってる。

○石川委員

確かに、大阪、別に Osaka-Amusing Creations と書いてその下にあるので、ここに大阪はなくてもいいのかなと、大阪はめざしているの、そういう意味では Global Co-Creation Hub。響きが良い感じがするし、皆さんの概念も入ってくるのかなという気もします。

○橋爪委員（座長）

カタカナ英語としても分かりやすいのは、Global Co- Hub かもしれない。

○野村委員

個人的には、もしそこがはまるのであれば、「Creative」と「Creation」が被るのは嫌なので、青色の何ちゃらイノベーションの何ちゃらは結構出しやすいので。例えば、僕がたぶん前々回提案した「Transforming」みたいなのかなと。「Creative」な「Innovation」する場で共創します、「Create」しますは、若干違和感があるかなと。

○橋爪委員（座長）

そろそろ時間がきています。英語は、引き続き精査させていただく。
一点申し上げますと、2025の博覧会の正式名称は「2025年日本大阪博覧会」。「大阪・関西万博」が通称なので、「2025大阪・関西万博」という表記は使わない。また「1970年万博」という言い方も正確かどうか。全体を通して、2025と1970の万博に関していくつかの言い方が混じっているのを精査いただきたい。これまでのご指摘とあわせて、事務局と私の方で預らせていただいて、整理させていただきたいと思っております。

○高橋委員

6ページの3つの柱が気になりました。「超スマートシティ」という言葉が出てくるので、これが後半の「方向性」と繋がっていればいいかなと思いました。「誰一人取り残さない」というのは、今までどちらかと言うと部分最適だったものが全体最適になっていくような概念なのかなと思います。それと3つの柱の下に白丸が三つありますが、下の二つは良いと思ったのですが、上の一つ目が上段のメッセージとダブっている感があるような気がしたので、これはもうちょっとメッセージを。「誰一人取り残さない」と「超スマートシティ」を掛け合わせたような言葉にすると、すごく締まってくると思いました。

○橋爪委員（座長）

三つの柱の一つ目の白丸を。

○高橋委員

ここだけちょっと浮いているような気がします。

○橋爪委員（座長）

全体のデザインは、最終的に精査していきたいと思っております。

では、次の議題です。「めざすべき取組の方向性について」説明をお願いいたします。

◆事務局から資料4の「3つの柱ごとのめざすべき取組の方向性」部分を説明。

《意見交換（「3つの柱ごとのめざすべき取組の方向性」部分）》

○橋爪委員（座長）

この原案も、前を踏まえた意見が中に盛り込まれているかと思います。30分ほど時間を取りますのでご意見をお願いいたします。

○野村委員

議論の抽象度を確認させていただきたいです。社会の方向性と政策の方向性が混じっていて、それは別にいいと思うのですけれども、予算措置・予算要求を考えるともうちょっとエッジがかかった具体的なタマを書き込んだ方が良いのかなという気もしています。

例えば一番分かりやすいのは、7ページの右上の世界的なアミューズメント・文化の創造、全部書いてあることにアグリーなのですが、文化等を創造する時に、結局政策とは選択と集中というところが大事なわけですが、これだと「そうだよね」というところ以上にあまり出てこない。

質問に戻ると、この抽象度で「そうだよね」という合意が取ればいいのか、エッジなタマとかエッジな言葉を出した方がいいのかという質問が一つ。

もう一個は、半分冗談なのですが、9ページにある「おせっかい」はすごくいいと思うので、加えて、オバタリアニズムというのは、どうでしょうか。

○橋爪委員（座長）

大阪では、おばさん、もしくは、愛情をこめて、おばはん、おばちゃんという。

○野村委員

オバハニズムでしょうか。オバタリアンという言葉はすでにあるので。でも、何と云うか「おせっかい」もすごくいいし、むしろこういう案がもっと自由に出てくるといいですよ。

○橋爪委員（座長）

事務局案にも、10歳若返るとか、エッジが立っているというふうなのも分かりませんが、割と言葉的にも特徴的なものところと、全国どこでもという一般的な概念がある。一つの考え方は全ての項目について、とんがったと言うか個性的なアームで強く出すのが一つあるのかなと。逆に全般はこのレベルにしておいていくつか際立つようなところは大阪だけの概念とか言葉を使うというものがある。

○事務局

事務局がこれを考えるに当たって、前回も色々ご意見をいただいて、出来るだけ大阪ならではのエッジを効かすということも我々としては念頭に置きながら書いたつもりです。

ただ、全部が全部、全てそういうことでタマとして表現出来ていると言われると、

なかなかそこまでいってない部分があるのですけれども。今までの分析を色々やってきて、大阪ならではの将来の姿を考えた時に、どういうことが実現しなければいけないかということを考えて書いているので。表現的に必ずしも個々の言葉自身がエッジを立てるといったところまで実現していないのもあるとは思いますが。

○野村委員

例えば私、経産省に元々いまして、今はスタートアップの経営層におりますけれども、7ページの三つ目に記載のある「チャレンジする人を全力で応援するスタートアップ拠点の形成」なんかは、例によって富山県も多分同じことを書いているはずなんですね。

たとえば大阪らしさを出したいということであれば、僕であれば、今この瞬間の思い付きなんですけれども、地域発ベンチャーとか、地域経済圏を創るベンチャーのつくり方を全国、ひいては全世界に教え広めるフレームワークをつくる、ぐらいの言い方をするのだと思います。

つまりここで、フレームワークとかパラダイムと言ったら大袈裟なんですけれども、一つのプロセスをモデル化してしまうぐらいのトーンで言えば、比較的エッジが立つかと思えます。今日のこの時間は、超個別論でそういうことを言っていくというのでよろしいでしょうか。

○橋爪委員（座長）

それをお願いします。

○野村委員

じゃあ、そのようにしてまいります。

○本村委員

今ので、エッジの捉え方が二つあるなというのに気が付いたのですけれども。「What」という意味で明確にするということと、山は今の三本の柱で、その山に対する登り方というところを明確にするということと、二つ両方明確にできるとよいと思ひまして。この7ページの方にある中には、サービスとして実現できるようなものと、それを支えるための基盤的なものが若干混ざっているということに今、気が付いたのです。

今、おっしゃった世界にも持っていけるフレームワーク、基盤やモデルをつくるという要素はすごい重要で、この部分はもしかすると9ページの方に明確に分けた方が、いざ、双方に関係していても完全にエクスクルーシブである必要は多分なくて、サービスとしてファーストライアルをするのが7ページにあったものを、それをエクスポートできる標準や仕組みとして世界に発信するのが9ページというように、逆に関連してても良いのかなと思ったのです。

○橋爪委員（座長）

今回、府民に行政の姿勢を示すという意義が一方であるのですが、万博を契機として今までになく世界の中の大阪、世界の関係性の下の大阪の取り組みを強調することも求められている。最後のページは、そのあたりに特化しています。他のページもそういうことを意識するのであれば、大阪へ世界中から人が集まるというイメージが重要。先ほどのスタートアップのところも、大阪の中だけの内発的なスタートアップだけでは十分ではない。世界の人が大阪に来てチャレンジできるということを前に出して、大阪モデルを生み出し、それを他に広めるというイメージが不可欠。

もう一点、申し上げたい。近年、経産省が「未来の教室」を提案している。従来とは違う教育のやり方を、文科省と経産省が連携している。そのような概念も頭出しとして入れていくと良いのではないか。また今立ち上がりつつある新しい考え方、たとえばサイバーとフィジカルを融合するアイデア・考え方を各分野に入れていくことも大事。

○本村委員

従来の枠にとらわれなくて、むしろ融合型の方が全体としても統一感があるのですね、きっと。

○野村委員

ちなみに、「未来の教室」事業の元々の予算は僕が取ったと申しますか、文字通り僕が資料を作りました。こういう経験もあって、今日この場での議論はどうしたらいいかなというのを確認したいと考えております。預かればそういうワードはたくさんご提案できますし、政策論もある程度は展開できるのですけれども。

○橋爪委員（座長）

8 ページの教育のところですか。

○野村委員

全般としてです。

○橋爪委員（座長）

それぞれ特にここだとおっしゃっていただければ。

○嘉名委員

全体としては、よくまとまっているかと思います。実は、各論的な話になりますけれども、例えば、7 ページの都市魅力です。ここの書いているところは、野村さん風に言うと、アグリーなんです。

例えばずっと大阪の歴史・文化の話をしてきて。そういうものが蓄積しているという

こともあるので、そうすると最近だとクラウドファンディングとかで世界の人が地域の文化財を守るということが普通にある訳で。歴史・文化、ここが先端じゃないと駄目みたいな発想を止めて、そういうことを書いた方がいいかもしれないと直感しました。少し下の項目にそういうことも付け加えていただくといいのかなというのが一つです。

それから今日、垣内先生がお休みなので、本当は垣内先生の意見をもらった方がいいと思うのですが、バリアフリーという言葉です。これは業界の人はみんな良く知っているのですが、バリアフリーという言葉が通じるのは日本ぐらいで、実はグローバルな用語ではないのです。アクセシビリティとか、最近はアクティブデザインとかそういう言い方もしますけれども、でもそうしてしまうと日本人には分かりにくい問題もあって、悩ましいのですけれども。結構、賞味期限が長いプランだとしたら、本当にこの言葉を使うべきかどうか。特に垣内先生の意見も大事かなと思っています。少しそのキーワードは考えた方がいいのではないかと。

その隣の「住環境」、ここが一番苦しかった感じが見えるのですが、7ページにも「環境」とあるでしょ。8ページの「住環境」のところ「自然が再生され、自然にふれあえる環境との共生」と書かれて、環境は環境でまとめた方がいいのかなという印象です。そうすると、「住環境」というところが、これも実は上の「都市基盤」のところで書いてある MaaS とか自動運転のところとちょっと被ってて。ここを「住環境」とするのか、さっきの話ではないですが、地域とかコミュニティとか、振り方を変えてしまうみたいなことの方が全体として整合が取りやすいかなという印象はありました。

野村さんがおばちゃんと言ってましたけれども、例えば産業ベンチャーでマザーエリアというキーワードがありますよね。何かが生まれて、大阪の発展にも繋がるのだけれども、それは各地に飛び火していくみたいなそういう時に、さっきのオリジンとかそういう言葉と近いのですけれども、マザーエリアという言い方もあるかなとは思いました。

○本村委員

普通だとバウンダリ（境界）をなくして、業界を跨ぐという意味で言うと。そう思って今見ると、技術が割と分断されていることに気付かまして。例えば7ページのイノベーション拠点の形成なのですが、この技術が先端的なラボみたいなところで作られているという、隔離された感を受けまして。この2030年の時期だともっと日常化してないとおかしいのではないかなと。そういったテストベットして、新しいことを試したものが直ちにサービスで使われて、使われたフィードバックが開発者に戻っていくというようなダイナミズムがあると、リビングラボという概念に近い。

○野村委員

嘉名先生のおっしゃる通りですし、本村先生のお話も全くアグリーで。People's Living Lab が万博のテーマになっておりますけれども、クラウドファンディングもその好例ですが、その地域に住んでいる人たちの参加性とか主体性みたいなことがもうちょ

っと匂ってくると、ハッピーかなと思います。ベンチャー支援とか農業支援とかを打ち出したところ、ここに住みたいとは思ってもらえないのではないかなと。わちゃわちゃとして、回ってく、動いている感じがあるといいですね。

○本村委員

さっきのアクセシビリティというイメージに、本当に全般的に共通しますよね。

○野村委員

超各論で参考に申し上げますと、東京タワーのふもとに大本山増上寺という大きなお寺がありますけれど、元弁護士の友人がそこで僧侶をやっている、クラウドファンディングで増上寺の瓦を全部替えようとしているのです。関西圏でもこういった取組が増えていくと面白いと思います。

○本村委員

教育や学ぶということと、トライする・体験するというのがシームレスに繋がっている感じだとよいのではないのでしょうか。この中にあるものは全くその通りなのですが、それをまだ分けて書かれているように感じました。もっとオーバーラップする感が出せていたらよいなと思ひまして。

○高橋委員

私も気になりました。次世代の人材みたいな話が結構散らばっていると感じます。教育は、やはり未来に対するものなので、人材のところや、育成みたいところにフォーカスする。ある程度強調した方がいいかと思いますが、それが散らばっているのがいいのか、9 ページで最後に、ばーっといった方がいいのかというのが気になりました。

○本村委員

9 ページは、そこを全部まとめて。ここを結構上手に使うと。関係性を表すのが9 ページになるのじゃないですかね。

○野村委員

あとは、攻めの政策メニューと守りの政策メニューが被っているので、だからエッジが効いていないのかなとも。

○本村委員

フレームを整理するようなものを9に寄せると、逆に7、8で攻めることもできるのじゃないのかなと思いますし、その攻めていくところに例えば参加型というキーワードを入れると、ちょっと従来のものと差別化できて、アワーリビングラボ的なイメージを

参加型という言葉を入れることで、ちょっとオープンな形がするのですよね。

○野村委員

多様なチャレンジの成長という①の方だと何を書いてもは許されるので、ここをよんちやにして。

○事務局

ちょっといいですか。これを書くに当たって注意したのですが、言うならそういう大阪ならではのエッジの効いた攻めの部分と、それから、誰もが安心できる安心感というもの両方があるだろうなど。それを上手くどうしたら表現したらいいかなというのを実は悩みながら書いて。今、そういう整理の仕方とかを確認するような感じです。

○本村委員

やっていてオーバーラップがあった方が何か全体のトーンも。それを違うアングルから捉えているということで、何か割といいと思いますね。9ページがすごく盛り上がりそうじゃないかと。

○薬王委員

先生方の意見はまさにアグリーなところがございまして、都市の話でいくと、誘致段階から万博のポイントとして「実験場」という言葉があるじゃないですか。大阪は「実験都市だ」という打ち出し方をした方が、万博との繋がりで絡んでいくのかなというふうにアイデアとして一つ持っています。

9ページに人材の育成などをまとめた方がいいなと思ひまして、特にアクションラーニングとかは、結構流行りて言われていますけれども、その中で本当に実際にスタートアップを作っていくような教育のシステムをまさに大阪教育モデルみたいなことを含むのはどうでしょうか。例えば、アクションラーニングを更に実地に即した形としてスタートアップの創設を中学生・小学生が日常的に行っていて、万博の時に生まれた子や2000年生まれぐらいの人達が、大阪出身であり大阪教育モデルを受けたことがブランドになるというような教育モデルを9ページの中に打ち出せれば、結構エッジになるのかなと思ひました。

○石川委員

先生方のご意見は、本当にその通りだなと思って聞いていました。

本当にここに入れられている項目自体は、すごく納得感があるので、後はそれをどうエッジされていくのかというふうにやっていければなと思っています。色んな都市の中で、これだけ自分達の強みを上手く整理できているというのは、これは非常に強みだと思ひるので、こういうところは評価したいなと。

後は、今日、皆さんが受けた意見を踏まえて、エッジの立て方を工夫して欲しいなど。そういう意味で9ページが上手くまとまっているので、その辺を上手く使って欲しいなと思います。

「大阪的価値観を世界的な取組を促す新たな価値観へ」というのは、先ほど野村先生がおっしゃったみたいに、これはなかなか面白くて。私が出ているアメリカのハーバードのベンチャー企業の先生は、「三方よし」を知っているのですね。あと、「やってみなはれ」。これは結構受けがよくて、可能であれば「やってみなはれ」というのもセンスの問題はあるのですが、ちょこっと入れて欲しいなど。

あと、「おせっかい」もすごくいいなと思った。もったいないみたいな響きの感じなので、もったいないという言葉が、それなりに世界に受けている単語なので、「おせっかい」と言うと、これはもったいないみたいなものかなと受けるのかなと思うので。そういう意味では、「三方よし」と「やってみなはれ」「おせっかい」というのは、結構海外の人は食らいつくのではないのかなと思うので、考えといて下さい。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。「おせっかい」もいわゆるホスピタリティとはニュアンスが違う。今のところ「おせっかい」を定義しているだけですけれども、今までとどう違うのかを考えないといけない。「やってみなはれ」も英語でどうするのかはあれですけど重要かと思う。他、いかがでしょうか。

○嘉名委員

教育のところ、さっきから議論が出ているし、確かに9ページに別枠で出すというのも有りだとは思いますが、ベンチャーのところも絡むでしょうし。前のページの絡みで言うと、リカレントの話とかがないと駄目かなと思って、とは言え教育は難しく、教育という言葉が行政が使うことの難しさがあります。恐らく学びとか学習とか、もうちょっと拡張しないと好きなことが書けないみたいな難しさもあるのでしょうかから、そこはお考えいただいてということですが、恐らく皆さんここで言っている教育というのは比較的広めの概念で、新しいものをどんどん取り入れていくということが盛り込まれるのだと理解しています。

○橋爪委員（座長）

私からも何点か申し上げたい。

一つは、バリアフリーに代わる概念を示すかどうか、事務局で精査をお願いしたい。日本ではバリアフリー新法が改正されるなど、バリアフリーという言葉が法律で使われている。そのままに使うか、それを含めて従来のバリアフリーではない概念に発展させるのか。グローバルにはアクセシビリティという概念になる。

あと、人にやさしく暮らしやすいまちづくりという概念をどう示すのか。普通、世界

ではウォーカブルと言っているが、日本語に訳すと「歩いて楽しい」とかになり、少しニュアンスが異なる。要は現行の言葉を用いるのか、それを越えてより大きな概念、ないしは新しい概念でとらえていくのか、ひとつひとつ言葉を選定していかないといけない。

また原案で抜けていると思うのが、文化財の利活用という点。文化財保護の概念が利活用にまで拡大された。さっき、人のエクスパンドの話もありましたが、概念を広げていく話があると思います。従来はこうであったが、これからはこう広げていくのだという発想が求められる。

○野村委員

僕からもう1点だけ、よろしいでしょうか。企業に助言するときなどによく言及するのですが、これから認知症とどう向き合うかという問題が顕在化してきます。その対策とは大きく分けて二つあって、まずは社会参画や地域参加という話。その中にはさらに二つあり得て、起業してもらうことと、次世代にアドバイスしてもらうこと。

この話を一般的な言い方に回収すれば、リカレント教育や学び直しになりますし、減茶苦茶エッジを立てると、70歳以上全員起業する街といったようなものになります。70歳から全員博士課程に入る、なんてのも減茶苦茶 edgy です。

この種の議論は、国なり、役所なり、いろんな会社なりで、みんな口にするものの、あまり取り組み切れていないんですよね。ただ、ロジカルにこれは正しい見立てだと思うので、やると言ってやり始めたら減茶苦茶響きます、世界中で。

僕は経済産業省時代にヘルスケア産業政策に携わりましたが、歩数に応じて健康ポイントを付与する取的な取り組みは全然本質的な解決になっていません。社会階層や年齢も含めた様々な要素をごちゃ混ぜにしてみんなで新しいものを生み出しながらみんなハッピーになるみたいなことを突き詰めると、今お話ししたような案に収斂していきます。本当はそこまでやった方がいいのですが、これはこれだけでワーキンググループでやる必要があるようなものなので、機会があれば。

話を戻しますと、世代間の交流の話とか、高齢化にどう対応していくか、みたいなところがちょっと抜けていますし、どこの自治体も実体としてはあまりプッシュ出来ていないので、書き込めておけるといいのかなと思います。

○橋爪委員（座長）

この間、上海に開業した世界博覧会博物館を訪問した。館内で上映されている映像が面白い。主人公がエキスポチャイルドという。2010年の上海世界博覧会の年に生まれた子ども達が10年後、20年後にどうなっているのかというストーリーになっている。大阪で考えてみれば、2025年に生まれた子ども達が、2040年なら15歳、2050年は25歳になる。私たちもそのような大きなフレームで、未来をイメージできれば良い。エキスポチャイルドとか、エキスポベイビーというか、これから生まれる子ども達にとって、

2040年の大阪がどのようなようであれば良いのかという視点が必要かと。

○本村委員

ちょっと、子ども達というと、直近の子どもをイメージしがちなのですけれども、もう少しスケールの大きい、何か輪廻転生的なのか、さっきの高齢者で言うと生きなおすとか、そういう循環的、サイクリックな感じがあるとよいと思います。

○野村委員

還暦2週目みたいな。からの、そのあとで更に3週目まで。

○本村委員

確かにそうですね。還暦のスケールをもっと伸ばさないといけない。

○橋爪委員（座長）

では、おおよそ想定しておりました時間ですので、ここで一旦、切らしていただきたい。この件に関しては次回の会議等で固めていきたいと思っております。次回、ワーキンググループと事務局で調整いただき、各委員にも事務局とやり取りされて、ご意見等を出していただければと思います。

では、最後ですが、将来像の時間軸に関して、事務局、説明をお願いいたします。

◆事務局から資料4の「ビジョン取りまとめに向けて（将来像の時間軸の考え方）」部分を説明。

《意見交換（「ビジョン取りまとめに向けて（将来像の時間軸の考え方）」部分）》

○橋爪委員（座長）

2040年、2040年代、2050年とか、いくつかのビジョンの時間の設定の仕方があるということです。この図に関しまして、御意見をお願いいたします。

私がさっき紹介したエキスポチャイルドとは概念が違いますが、今の子ども達が万博を経験して世に出る時期というので、2040年ではどうかという判断もあるかと。

○本村委員

この横軸を見ると、ぐっと現実感が出る。良いなと思ひまして、2020年時期の40代にとってはとか、30代にとっては等、バリエーションがあると、なおさら実感が増していいなと思ひました。

○石川委員

10年前倒しにするというのは、それだけ急いでやるという意味なので、それはそれ

でいいのかなと思いました。

それはこのチャートを見てそうなのかなという感じで、2040年でもいいのかなという気はしました。

あと一点だけ、別の話なのですが、さっきの「やってみなはれ」が英語で何かなと思ったのですが、バブソン大学というベンチャー育成の大学で、Action Trumps Everything というのがあって、行動は何事にも勝るというのが、かなりニュアンスに近いのか。ちょっと検討していただければと思います。

○川竹委員

BIE 総会に行かせてもらった時に、一人の外国の方がプレゼンテーションで「やってみなはれ」という言葉をキーワードにされていて。その時に会場の世界中の人にも響いていて、日本の良さが伝わった言葉だなと思ったので、それはそのまま出しても響く言葉なのかなとは「やってみなはれ」だとは思いますがね。

○石川委員

「おせっかい」みたいな感じで。そのままにさせていただいても、もちろんどちらでも。

○橋爪委員（座長）

ローマ字で「やってみなはれ」も。

○石川委員

「やってみなはれ」の方がいいかもしれないですね。説明のところで Action Trumps Everything の方がいいかもしれないですね。ありがとうございます。

○橋爪委員（座長）

「やってみなはれ」やね。

○川竹委員

はい。「やってみなはれ」で。

○薬王委員

私も結構万博のムービーを聞く機会があって、安倍総理が英語で「やってみなはれ」と言うシーンがあって、その時は「Well・Get・It・to・Then」と確か仰っていた気がするので、参考にしてください。

○石川委員

お任せします。

○薬王委員

お任せします。

○石川委員

結構、「やってみなはれ」の議論ができるのです。これは、非常に収穫です。

○野村委員

違う話をすると、「やってみなはれ」もそうなのですから、サントリーの事例はハーバードビジネススクールほかのケースになっているそうです。

○嘉名委員

サントリーがしっかりと持っていますね。

○野村委員

そうなのです。サントリーも 70 年で記念公園をつくったりしているので。Amusing Creations と「やってみなはれ」でサントリーと吉本に協力してもらおうとか。個人の発言なのですから。

さて、この 2040 という意味では、そうですね、ぐらゐの感想しか無いのですけれども、だからこそ、遥かな未来としての 2050 に照準を置くという議論もしてあり得るということだけは、申し上げておきたいです

○橋爪委員（座長）

横の軸を 2050 まで伸ばしておきつつ、2040 を想定する。

○野村委員

まさに。見据えてる感をきちんと出していくという。

○橋爪委員（座長）

見据えてる感覚や、貫いている感覚が重要。

○石川委員

2050 年を見つつ、40 年をターゲットにしているみたいな。

○本村委員

確かにモデルを作って、世界に発信で、世界で実現が 2050 ぐらゐだとすると、意味合いがちょうどいい。

○野村委員

さすが。素晴らしいと思います。

○橋爪委員（座長）

他に何かございますでしょうか。

○薬王委員

さっきの本村先生のお話で、ビジョンの時間の設定について、具体的な年代層ごとの記載をされてはいかがかというお話に対して付け加えなのですが、ある年代の人達は例えば1つ下の年代層をプロモートするみたいな感じで、それぞれの年代層ごとの期待する役割などが記載されていると、その人達がどういう気持ちで万博を迎えるべきかという一つ大きな目安になりうるのかなと思いました。

本村先生がおっしゃったように、実際に2025年の大阪万博を経験した人・大阪人が、2050年に世界中に行って同じモデルを世界中で展開しているといった未来が、2050年の行く末にあれば面白いかなというふうに思いました。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。世界、大阪化計画ですね。

○薬王委員

まさに世界、大阪化計画です。

○橋爪委員（座長）

世界の人が大阪に集まり、大阪で学び、仕事を起こし、世界で活躍するというふうイメージでしょうか。

ただ2050に向けて、右肩上がりのイメージを示すというのは、やや昔風ではある。図に関して最終的にデザインで対処したいと思います。

○本村委員

矢印を、ネジを巻くようにグルグルすると、一瞬下がっては次でまた上がるような感じで。スパイラルをお薦めします。

○橋爪委員（座長）

量ではなく、質の転換を我々は言わなければならない。

次回、ご意見いただければと存じます。全般に何かございますでしょうか。

○本村委員

一点。データの利活用という言葉が部分的にはあるのですがけれども、実は、これ意外と今現状を見ると全然進んでない訳ですよ。これは電子政府とか、エストニアみたいな、大きい括りでデータ化、デジタル化というのは全般的に必要なかと。プラットフォームとして打ち出すのか、生活基盤にするのか、例えば医療系なのかは多分、この時期を考えたら一元的に入って欲しいですよ。そこに向けてのアクションプランというか、メッセージがあると、ちょっと勇気づけられますので、是非ご検討いただければ。

サイバー上に街ができるぐらいのスケールを。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。

以上